

東日本大震災発生後の福島第1原発事故に伴う計画停電を機に、職場や家庭で節電への意識が高まっている。県内でも太陽光発電で蓄えた電力を家電やバイクに活用したり、先人の知恵を生かした暮らしを実践している人がいる。また、最新の省エネシステムの導入や社員の意識高揚で節電対策を図る企業も増えている。省エネに積極的に取り組む個人や企業を紹介する。

節電編 Vol.2



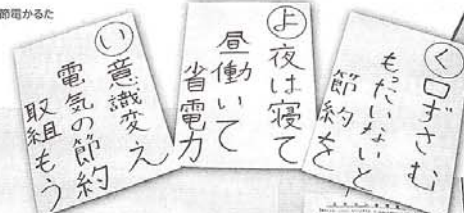
防災・節電特集

社員が知恵を出し合って 楽しみながら節電意識の向上に努力

わが社の節電対策
疾測量
(甲斐市橋原)



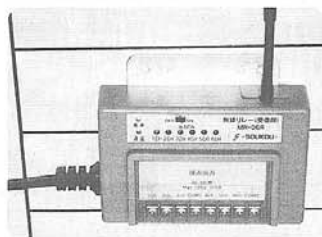
社員手作りの節電かるた



エアコンスイッチのそばには
温度計と回転記録を設置し、
常に管理している



社屋に設けた屋外遮熱ルーバーは放射熱を中に入れない



デマンド監視装置が同社の消費電力削減の力を測る

「〇すむもつたないと節約を」。今朝も疾測量の社屋から社員の元気な声が響く。省エネの心算は五七五に合った節電かるたの音は、昨年からはまったか。たは社員が知恵を絞って考えたものだ。藤巻高秀総務部長は「社員の省エネに関する意識を高めるために、節電かるたは特好の材料です。朝会も節電かるたの内容を社員自身が説明することによって節電への理解も深まっています」と話す。

同社の節電への取り組みは早くも、2001年からのぼる。月1回の社内研修で節電運動の開始を宣言する。前年比で5.0%の節電に成功。翌年にはさらに節電できる場所はないか検索を重ね、電灯の調光器や白熱灯の設定、省エネ型エアコンの導入などを進めてきた。

中でも06年に採用した「デマンド監視装置」の導入は社員の意識向上に大きく貢献している。

たとい。監視装置は設定値に近づくと警告音が鳴りますが、これが通る社員が走ってエアコンを消しに行くと、使用電力が瞬間でも上がれば契約電力が増えたりしてしまい、まさに命取りになります。その姿を見たほかの社員も節電への意識が大きく変わったかと思いきや、「と藤巻部長は振り返る。

東日本大震災後はさらに省エネの取り組みが加わった。月に壁や天井を白色系にし、外光だけでも室内が明るくなるよう工夫したほか、7月に社屋の隣の事務所窓に屋外遮熱ルーバーを設置。10月にLED照明器具と蛍光灯の取り換え、今年2月、屋上に最大出力30.0kWの太陽光発電設備を設置した。

ルーバー設置を推進した和田隆男さんは窓の内側に設置したブラインドでは放射熱が室内に広がってしまいます。ルーバーやそれは窓の外熱を遮るメリットがあります。山梨の夏は意外にも乾燥しているため、直射日光さえ防げばエアコンの使用量を減らせるんですよと話します。

同社の取り組みは、昨年夏に政府の節電ポータルサイト「節電0.1%」で紹介されたほか、県の循環型社会推進計画「サステイナブルな社会」で認定されている。

藤巻部長は「17時の1.0%に比べて、消費電力が半分に下がっています。今後も、効率よく冷房がでるようペアガラスに変更したり、作業効率を向上して残業を減らしたり、作業スペースを節約したりして、省エネを追求していきたいと思っています」と抱負を話しています。

